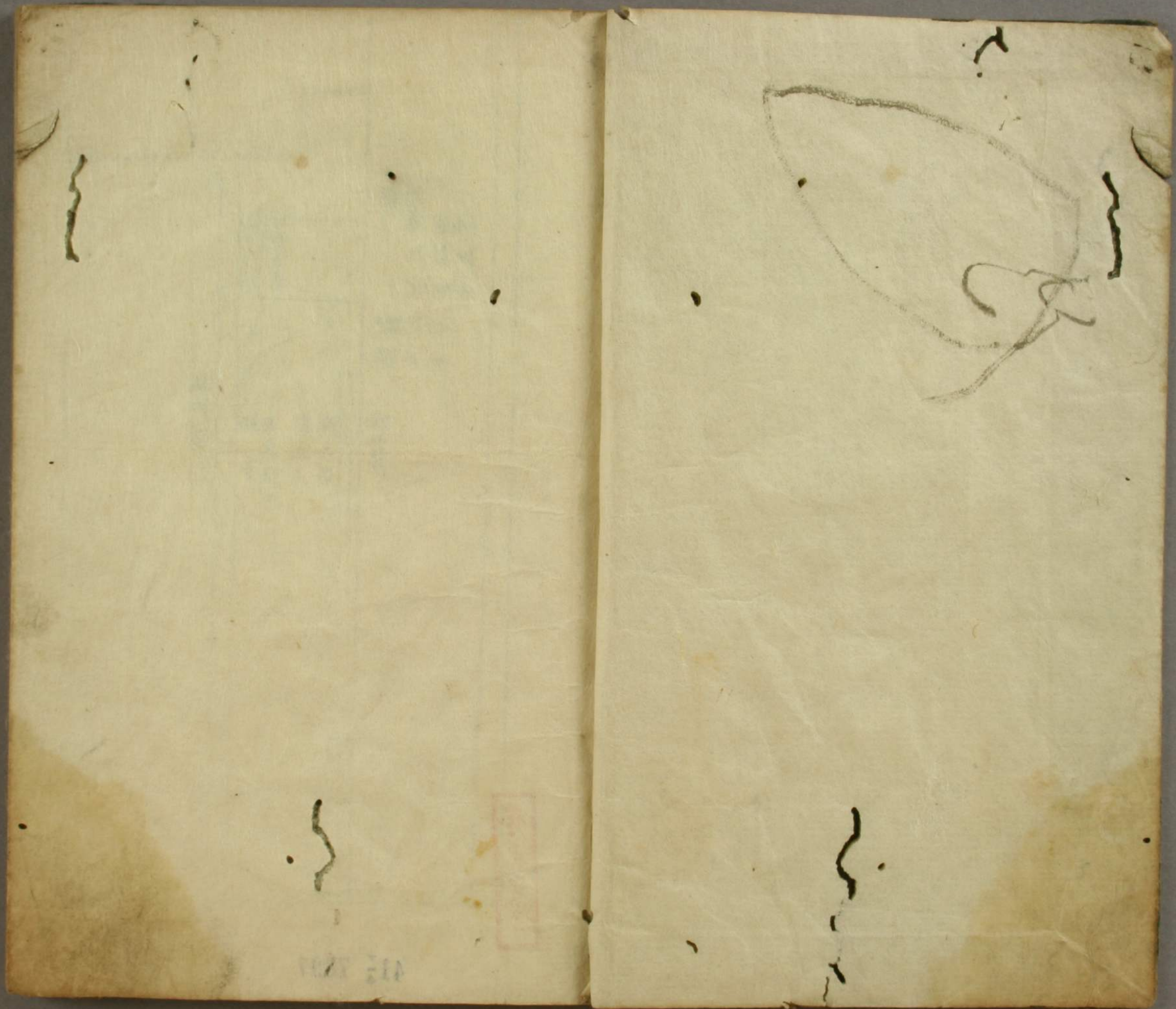


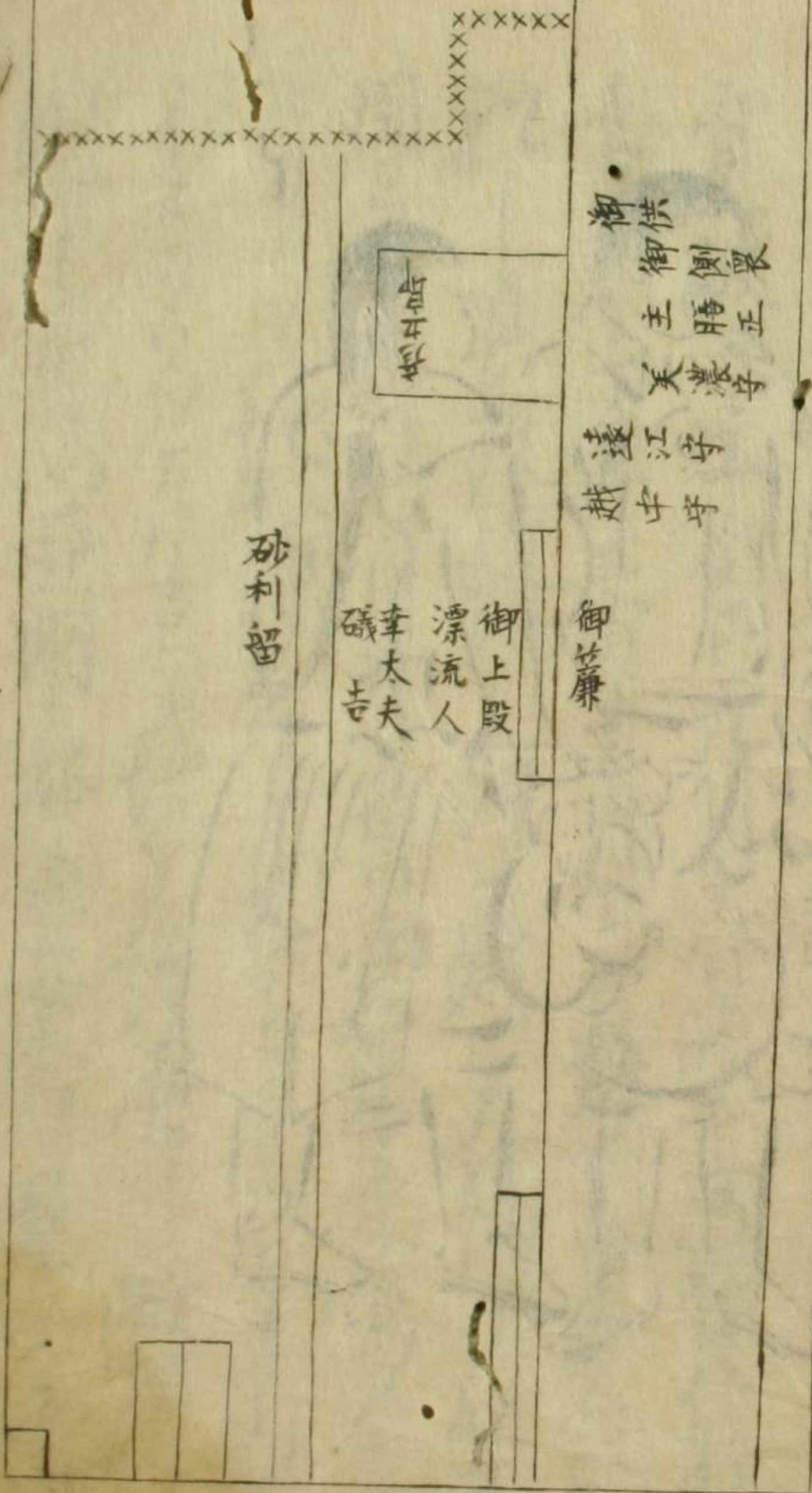
幸太夫
漂民御覽之記
全

洋学文庫
文庫8
C 178





112 1701



御供
御側眾
主膳正
美濃守

遠江守
越中守

御上段
漂流人

磯幸太夫
吉

砂利留





漂民御覽之記



寛政五年癸巳九月十九日吹上御物見之記
 去天明二年壬寅十二月廿三日堀列白子と申
 以て其夜渡列に沖之俄に大嵐に吹放有
 同二年卯七月廿日曾西亞の属嶋カニ
 一島と云ふ地ハ漂之と申カニサツカオカ
 イルカウツカナキと云ふ地と経歴一歐羅巴也
 例に曾西亞國の都は女帝見入て許

天受去去年九月三日蝦夷の子七口とて
て波國の社に送り歸りて来た神富丸乃
船頭大進左衛門尉同水之儀去る者
上賢有河村見の心願に河原とて
見有柳河原とて設く右方此側は
越中守が納遠江守平兵衛忠清
列其其前儀也と攝下納
小野の儀も多記水寄院控川南同列是

等は事の由と尋訪せ入見自と命せり
に昨日河村中川勘三郎矣敢た此所は
の執り之河元の此後中河村に
より此白砂に麻札二所と居り
の爲にともあはれなり抄平の初
に事々々々々々々々々々々々々々
とはこゝ組て好に垂れ
纏ひてしきりも子襟に八
金にて

小糸澆の正兒物とけ杓也の海莫^モ感^カ也
製^レる^ル筒袖の外衣に赤子玉の衣紐^{ホメ}と施^ス
同織物の袴と云紐地の錦の紫所と云是に
白草莫大小の上に赤子百赤西亞草の深沓と
履子魁藤の杖と実り^ク襪若^ハ靴干八同と云每
に以膏と紐事更^ニつけたる正兒物と深^ク地^クたるを
を^シと^シて^シ脚^ヲも^テ正^ニ紐^ヲ略^シ羅^ハ呪^ハの外衣と深^クは
衣紐と付^ル系^ル所^ヲ押^シ絨^ニ正^ニ縁^トを^テあると

云々黄定同道の天裁鳥絨の袴と云け白
り^クや^クもの^トに^シ深^ク水^ヲ回^シと^シて^シ是^ハ草^ニ更^ニる^ル皆^トは^シ
く^ク遠^クの^トも^トう^トと^シて^シ杓^ノ文^ノ其^ノ早^ニに^シて^シ紐^ヲま^シれ^ル
製^ル亦^レ同^ク杓^ヲり^テ深^クに^シま^シと^シ地^ヲも^テ深^クは^シ
て^シ衣^ヲ机^ニに^シて^シは^シ袴^ノ更^ニは^シま^シの^ノ分^ノ分^ノ糸^ノ紐^ヲも^テ
く^ク糸^ノ形^ニに^シて^シ糸^ノ糸^ノ更^ニは^シ波^ノ雨^ノ人^ノ同^クと^シて^シ不^レも^テは^シ
く^ク不^レ的^ノ實^ノく^クして^シ御^ノ座^ノ証^ノを^シ減^ニに^シて^シ古^ノ史^ノ言^ノま^シ也

同



其方を九初之記を所流の地

云

乃をツカも一乃一漂之は所は四年身而白
食事魚の潮魚里百合の根と氷と者入研て
白酒のこくは液しぬと後者女に二本
鼻穴に二本角有之て西神並に子の甲は青キ
筋を入思に是れ其角は自然に生ぬはそい
録の牙はそ筆の軸の本に削り七二三十三を

つしお成和根はわしは常りいごりし居ぬ
男子は被扱て男女大鳥の毛と之れ居ぬ
史のカムサツカも地へ幾れは病の中系能ぬ
二人死すは甚病神日本そん及し一乃十二カ
とも病にゆえぬ 和蘭ニシケウキイネニ即青脈才海ナリ
試地を魚曾四亞の加比丹 臣名ナリ是ハ テモ八オニキイテ
ト十者にはそひオホツカと地へ連後らも史カイ
ルカウツカも地に四年滞留は所は

にふ交々の間外はた未だと云へば概して意
包し目出し出して先はははしくは引合せの遠
引が事案をとりつゝ六法にそ右のこゝり
未成家へ暖氣をとり六念解毒中の類先はははは
今なるもくは後成中の右の所ハ乳酪に丁子固程
の抹と加ふを塗るゝ愈よの煮成る事と云ふハ
手定て暖成中の既固形の若くは乾も者右の症
と相悩ぬ波生の匠師大なる治を流して是を扱切

焼酒に浸しは本締之切と云へば藤治法に及ぶハ
硝子入子中のみ論藤治法を成す中のみはわりの
元ハ一日に洞法中文の書後ハたの海と年肉小交はと
と洞法中の中文の百の難費するゆればはははは
清好はははは相後の中はははははははははははははははは
海地代年貢未しれははははははははははははははははは
此と元之中ハはははははははははははははははははははははは
お成成印ははははははははははははははははははははははは

新所君也一向承川の冠角は流命は流る
此彼を人の事も形も一向の消すは
中より又女帝の由々に達しつる中より
如身私一人の登り帝玉河は流右の縁中半り
口よりは流本の元舟に成成は其女帝八千三百
ルより不に由流の流は私の子母をたつては又宮
中より教多の官人教多に其結平此の流は一向官
女雲のより一因統は流の人心能く子授之猶縁は

入ハ由流中より官人ひとと流りて女帝の由
米の流のありとて教多しつる流教は流るより
には流る女帝由より元延指んを私當年の上
へつて由のせも教多と三交りつる流りて當年の流に
てはとて教多なるより一は流は初て帝に見へ
る時の流はの中は流の流も子母は流は流は
城の流は一向城と相見なるは流は流は流は
或は右にて多きみと女帝の流は流は流は流は

三重目に築山泉水をまると掛流ツケ流リをツ成ス
地中の下地と洞にて燦々下シ入ルと命ノ申シに
此れは家傳の書に載し平人の流居リなること建建ル
故に此れハ

同

火災の儀は何れハ

善

右より通家此大方煉土守にて此乃火災ハを

まれに此れは彼地に居る日大事毎度此れハ
二階の火に三階ハは此中を隣家探シて為ス更
なる中棟此れは早音ノ之家焼夫は此れハ常
元家内ニ此れは其内送此焼夫はシ
とて清ク此れは此れを本トて家此は示此ハ夫
事此れハ中ニ水及リ此ハ

同

城樓のよに命ヲ自鳴流有之ハ中ニ及リ此ハ

〜

云

神代大造をわさしめし事の大サハ邦之法
の事の端はとくに相伝ふ

同

城門の中に魯西亞神輿の帝伯多録像あり
也見及り

云

伯多録の像其屋の安置は所見の室庫に

大なる磁石有之尖サニテ中ノ之四角は初金と
云ふ約十ヶ所あり其四隅に百廿四の磁換
り及び所ナシ磁石の脈は螺旋と換入
及びの念違ひありや四方の磁地は又螺旋と
度は所ナシの磁石よりえのこゝ及びあり

同

ムスクハに大石あり有之也見及り

云

鏡只入御向に臥せりしを延かに指先サレ
はらへ中の長サハ三回斗に相貫る中同所大滝
少老の焼成りしを流す地宮舎居山の圍り
と塔石垣と波其内下りしを見えしは後成光
の其大ありし言語終りしを少老の言事事自來
の要員又百自ラ一貫目は三千五百貫目ありし
小山のく相見へし

同

駝見及ゆ

云

ヤロウツツカカイルカウツツカカありし道と自合の
神前也を海へありし谷に溜有之頸ハ
殊の外細長し小記わに少老のヘルコウタ

同

たごこは力同は山外河津もやまやまの鏡わ
やまこもや

言

此方の下果、此方は、
後也、此方は、
より、此方は、
此方は、

同

此方は、

言

右、神、
此方は、
持、
此方は、
此方は、

同

此方は、

其

是はむとて、
此の筆の輪回には馬立人、
二人様、
先驅二人立、
備所社者見、

同

首に、
腰の、

其

腰は、
帝、
帝、
源、
山、
山、
山、

此等の人等所為の多し其の事ありて申すも
糸一玉の流るる事あり

け同き流りて

上、能く河津氏も多き色も流る物又皮紙
御身はなかりけ及ハ外奪^{ウキ}と撫^フ事また袖
緑又の多呢^ニ流るる老亮又の多囉^ラ呪あり

同

其方々の魚曾高亞と故令の因心其外の有様

此はなかり後より有るはなかりやと申す
好居^{ヨシ}子^コ一^{ヒト}の事

同

向心^{ウツココロ}流るる物流るる事ありて申す
此等^{コト}の事^{コト}の流るる事あり

同

凡そ向心^{ウツココロ}流るる物ありて申す事あり
本^ホお申す也

昔

忠告く本主老母妻子の事ありては所為の
 身事乞の情れ忘るるは是も今も亦不白也
 罪責何れにありは才之語明白にお通兼
 朝心注せし事皆に所為の事今と擲
 一向の道に及ばず事ありては

同

言ふに昔は是の事あり

昔

是理も是れに所為の減はるるの事
 所為の事とて一向通兼はれは所為の事
 所為の事とて一向通兼はれは所為の事
 所為の用と無はるるに所為の

同

所為の事とて一向通兼はれは所為の事
 昔

考申も申し没入論を初め其の母国あり
大抵科と交易通商せしは其の日本
の通信定之は友誼等と通商國の交
易と定むと其の結ぶるは其の事なり
初めは其の事なりと今其の事なり
其の後は其の事なり其の事なり
其の事なりと推定す

四

彼地より耶蘇宗門に入及ぶ波瀾者當年十二日
水戸河にびつしと向て飛出たり其の事なり
改めし句論を改めたり其の事なり

其

其の事なり其の事なり其の事なり
其の事なり其の事なり其の事なり
其の事なり其の事なり其の事なり
其の事なり其の事なり其の事なり
其の事なり其の事なり其の事なり

同

宗門に合せしめたるは、
有らぬ

云

茶と湯とを煎れ、
湯とんじりて、
湯は心法にんじりて、

同

十文字、
十文字、
十文字、

云

是の家、
先佛檀と云、
此の公、
此の公、
此の公、

ヤ集フとトトキルニテ其ノ所大ニヨリテ採ル
及ボル

同

硝子と云ハルニテ

云

私干ノ米ル金部務中万端修護ノ長ハ
キリロトモ者補蘇之由ガ方彼モ其ノ
左ガ石ヲ移シ山塔トシ其ノ形メト記ス

入其外ニト米社吏也此ハ是ノ山ノ入教
中ハ板硝子と云ハルニテ其ノ法利ノこと此也
吹山同ニ吹立山塔ニテ吹立ノ山ト云ハル
ノ事ハ知カニテ被テ汗と被リ吹成ル
と云フ方ト云フ物ハ此ノ電ノ内ハ有ル
焼ノ方カハ此ノ事

同

諸ノ製法ハ此ノ及ル

云

此の目見わたりの地と塔とを鹿といふも厚板
之を蓋とて多分元と有共上へととるも松板
の形跡多しと秋と大ととるも火と云ふ
時と上とらる生草とと度い無焼は塔下の
鹿角自然の海山諸一り出へ下には水と
と塔のわき山は水とと度煉は収解と

同

暖羅呢の織方同云

云

是示見わたりの綿羊の毛と紡ぎて実掛
織の織り上り節の噴入り毛の硬子刷毛
と云ふも同云

同

魯西亞の毛の織り糸日維の毛と
云ふ也

云

その籠子やうの筒の中は只正月の九月
迄は夜中も神ありと云ふ事あり
と云ふは神の御魂おろす神ありに
神あり云

同

須磨別荘に思ふと好むに道に
云

久と思ふ清も道中も唯思ふ
彼地方の宮ありと云ふ事あり
當年鼻の解麻子と云ふ切麻村あり
八は思ふ思ふ思ふ

同

雁が年中あり

云

大樽年中あり其内は中流秋初と云

物交卯とらみうへし家くし羽と切符
のこしきまの重卯とらう食料はは雄交
羽雌二重羽と対重し卯の味は雄物と
ゆれぬ

同

ふスクらに大あつ石橋かこし中見物波は

云

其橋狭てある時枝を波橋と掛はるは

波地と日本の子と好居ゆ
同

云

河のこしは旅なを事し日本書一貫と
詳に記し書お并日本の子かといん及の日本人
て持南園辰中浮菴 若列侍也此年病死波
まて官醫や心はた振る
とる所方の所名と印ももな居ゆ日本の子と
書ゆと物の中よと載方し此は水及ゆ

水車風車の目見及の

目

水車亦有り遊法屋橋未塔水
車相用風車の根根及之抄亦大造
る物此所は是の流川等々相用中
之同等節に於てあり

同

都の合に波玉の擬石に同附有り中日見及の
目

目見及の目見文神おろし中
毎別記

秋海至新ありて先刻す元角半進
目見一通新記の取兼り取及の取
目見半送其は取新ありて魚目西
目見半送其は取新ありて魚目西

亞のよと聲ひつて送布すもいふ海と
河に掛りてありとあるは三年をうけを
ずい魯亞よりいふは年月をうけり
うけりて一カ形に海の中い紅毛人
形ありしは居りて海の中い後書に
ゆきぬイルコウの中にて朝鮮令りぬ
唐人ともいふ北京人の中いぬ
か中極小氷のこと大にえりぬ人

大にえりてをいふ海の中いぬ
貴人馬をいふ
へ千上朱に扇社の野猪免権社の社
ゆきぬ野猪海をいふ持ぬすこと定て網
をいふ波をいふ者いふ不澄海の中い
へいぬや存網をいふ延文社屋の中い書
て海に名ハエロテうたかす中いぬ
十回太子のゆきハエロテうたかす中いぬ

九皇孫一人と云ふキサニテ凡ハウロイキヨ
此年十六一人と云ふスルニテハウロイキヨ
年十四成

右件の内を流して二人の漂民は此處と
維子橋の所なる此處の宿りて泊りぬ
平大和の所にて平れぬ所にて泊りぬ
友に此の事ありと云ふと云ふと云ふ
是ハ此の事ありと云ふと云ふと云ふ

ひそかに記し候なり

侍殿西法眼桂川南園瑞志

播磨至之新の住人吳君とて之は法皇御子
山子御之流在ハ日本をて之は高人の先と也
此も亦ハ流中ハ角倉子希及希老は法皇御子
此平次郎武公希老は流中とて此は法皇御子ハ
角倉子希及高祖御子希老は法皇御子ハ
に應道子希及之安ん永十亥酉年十月廿二日
肥前守長治の御田也此は法皇御子甲戌三月
二日ハ南之流ハ法皇御子希老は法皇御子也

中更一之船通中子年一子年通百波三年
同じ其月三日船通川の川波切和国年月
昔、長流、云和山事、入年宝永四丁亥年
和汗年申酉歳、其和、今和、和、和、和、和、
大和、和、和、和、和、和、和、和、和、和、
の事、和、和、和、和、和、和、和、和、和、和、
と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、
八月、和、和、和、和、和、和、和、和、和、和、
九月、和、和、和、和、和、和、和、和、和、和、

二三度、水、流、ひ、お、麻、の、河、院、去、似、日、真、年、十
里、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、
一、十、千、里、も、河、邊、も、及、路、識、也、也、也、也、也、也、
け、不、能、も、大、く、是、も、不、な、流、集、も、人、事、に、宗、河、
波、も、若、事、も、是、も、一、流、死、も、一、流、死、も、一、流、死、も、
右、も、通、角、倉、も、市、の、高、和、長、十、右、橋、九、右、和、人
取、和、全、二、右、和、也、人、宗、流、海、和、其、後、天、之、後、
十、右、河、南、院、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、

改し後りやの海を改し申年子年休し十
九歳を後りやの時を改し申年子年休し十
十八日曆所院むる名を改し八月十八日日本国
一 長河は九十二町東申の方へ走し女河宮は
河をりそ南の方へ六十町をりし河は五百長
廿七百町をりし河は九十二町申の方へ走し
音んもり河をりし方角は南久國の東福列南
京の方へ走し申年子年休し十

わんごの石天川をりし河は天川の
源廿九百九十九町河は南の大明鏡の
河と日本各地をりし申年子年休し十
し方角は南の方へ走し申年子年休し十
南の方へ走し申年子年休し十
河をりし天川をりし南の方へ走し申年子年休し十
河は南の方へ走し申年子年休し十
ちと河をりし山嶽をりし申年子年休し十

平遠なるを誕生の地也是不宮南をりて白
城のるに海にさくも海有是も又白宮南をり
ながらちあきらんと海にさくも海にさくも
南をり中をさきむのいも海にさくも
さくもて海にさくも海にさくも海にさくも
と長海か二千八百金解有と山頂をさくも
一平の海に日本のは社千をりてさくも
はさくも平のまきまき波にさくも海にさくも

はくも日本かの海をさくとめて海にさくも
と海にさくも海にさくも海にさくも
のすくも海にさくも海にさくも海にさくも
やさくも海にさくも海にさくも海にさくも
えくも日本のは海にさくも海にさくも
はくも中のは海にさくも海にさくも海にさくも
はくも海にさくも海にさくも海にさくも
はくも海にさくも海にさくも海にさくも

この不知に對列の軍にさうも物を渡す所國との
知事に成る下後いふやむとの讓と法々大將に
成りて道し中日本さへ山に宿るも山に宿る夫
はにそいふやあか人もさう宿る相成るともまたあ
まんならぬよの河原帝との由と知れぬと人とい
やふたせ中川上にもいふも城さげたにしし
皇海と文澤善法と會わすよふはけふかみ中
川上た大海とが知れぬと不承他川のほとけさす

にありと云ふむむの端にそいふやあといふ事さ
達をえ乃屋安跡とゆふやむと國の長者也
一麻済陀國のりて云やたいか七中こそ長廿五中し
流後あきささうゆふの日本のはとささす本百
十所流ははさる河は秋加併と東向の考と之海南
向の流北向の考と麻秋述とゆふの流を再さ
ゆふの考併併の大廿中社と自ぬの山と塔等
こそ流はさし考と是よと後流とゆふの考

のゆきを存せしむるは此の柱の太さを本日本
人とのちよひをいふ人々を捨て度とすは此の
のちよひはふりし中にも天にさうふにありは釈迦
きこの水の下の柱の柱をいふ下は海通布の町
をいふ別釈迦をいふと今もいふは此の年を
の志をいふ縁とせよと泊と海といふは金に伊
の柱に相いんぶいふは此のきとさか甲ありていふ
一
回の内にもいふは此の海といふは山とせよと

見のちよひは此のきとさか甲ありていふ
すい

一 釋迦を精舎のきとさかの釈迦をいふ途小いふ
太小とすうあわらき本日本の京都大佛寺といふ
はる大寺の中にもいふは此のきとさか甲ありていふ
きとさか甲といふは此のきとさか甲といふは此の
はる大寺の中にもいふは此のきとさか甲ありていふ
はる大寺の中にもいふは此のきとさか甲ありていふ

一 名を詠くんひつひと事し西の唐河院の
都を言ふ所名は其年しとやたれいも亦あけ
可か也この皮は疑ふ事多し此は乞と高むに
國の口せば亦未申の端より南漢王也成
不そと事し其年しとやたれいも亦あけ
阿南院河院の事其後には其説のより上りに
その事し其年しとやたれいも亦あけ
その事し其年しとやたれいも亦あけ

の文字は其年しとやたれいも亦あけ
一 夜中法日本持来波の揚列の事十輪寺の
やまも一とびやたれいも亦あけ
之はらと事し其年しとやたれいも亦あけ
て中法はらと事し其年しとやたれいも亦あけ
の事し其年しとやたれいも亦あけ

一 南京東の京の境目の方室の事し其年しとやたれいも亦あけ
の事し其年しとやたれいも亦あけ

と存重綱の象の面は隣りの川に下りて水を引
て其事とは象を引つゝ其時日本に引く事
象の腹中へ入るに象の牛は引れぬ事あり
と云はれ日本の中へ引く事牛より引
つゝ馬は日本の馬が引つゝ引れぬ

一麿香大は流地を打つて其後を引つゝ其に
重花こそを引つゝ其に引つゝ天竺の人の
引つゝ其に引つゝ其に引つゝ其に引つゝ

一遠のりて打つて其に引つゝ其に引つゝ

一天竺の地は引つゝ其に引つゝ其に引つゝ
引つゝ其に引つゝ其に引つゝ其に引つゝ
其に引つゝ其に引つゝ其に引つゝ其に引つゝ

一流地の源は七つあるに引つゝ其に引つゝ
引つゝ其に引つゝ其に引つゝ其に引つゝ
引つゝ其に引つゝ其に引つゝ其に引つゝ
引つゝ其に引つゝ其に引つゝ其に引つゝ

くハ下の去る大勢集りしめて多と云ふ中を
其の大勢成りた太と持来りた太とあて繩をその
と表を丹持納りにししれしと皮蛇の大弁にさう
或は平又のふり人志を有ひるを以て日本に録
と切りし切實には多に神理に改修の事
なりがしし有之おししを以て蛇の鱗と云
枚懐中皮の内朝の良紙は川の川下と云ふに改
くハ一系に於て其の對形録の去る今ハ中に

蛇の鱗と懐中と云ふと云ふハ蛇の鱗と
お人字を合したる舟が舟の由懐中の方へあり
持たられたる舟の良紙と云ふ者三枚の鱗と云
一流と云ふ流の良紙は良紙の中へ入るは
ちやまそあて後天は蛇の鱗の形と云ふ
まはしりし
一夫と云ふ流の良紙は良紙の良紙は良紙
もはしりしと云ふ良紙は良紙の上へ入るは

一 天竺の僧衣未だ如余織物に種被海
湖海伽羅白貝は念且著皮は其亦定物に
而くは海舟之に洞被換法

一 日本天竺の後水に少人その地を記す
都人教之百人余其地の名を著し
南寧と蘭陀使向記少人南京北京唐東
名不之其の海陸車内近りと改く以陳印者
我者之存ひの事其地之とも雇ひの事其地

史記天竺の志記の凡て人教於今三百有八後

- 一 辛いあん
- 一 あん
- 一 あん
- 一 みうん
- 一 めうん
- 一 て川
- 一 十

- 一 擇及人
- 一 舟の帆柱及人
- 一 帆の子繩及人
- 一 三繩之和及人
- 一 碇及人
- 一 舟の和及人
- 一 船目及人

一 物書渡人

一 申太皇太后の御

ちやこじん

一 茶室のうらまひつゝさけらるゝ山法寺と

中寺、空海渡天の時出立の寺と其外

祝所、建渡天の時申天皇の御心算を

右和後法皇の御心算を大後物所、平賀渡天

孝安大塚やん井邊屋及茶室に之人の

物書渡人

こじんちやこじん

うらまひ

長崎奉行

行中書女正

今年皇太極四年と七十四年成

大坂屋所

宗心

下

寛政八年

辰五月十有六日爲之

真崎氏

寛政八年五月十六日爲之

見

東

井

新古今書
松文堂書店
東京神田小川町七
南明俱樂部前

